



(Meredith Music Publications.
2012 請求記号●J124-994)

Performance Librarian Ensemble Librarian

オーケストラ・ライブラリアンという仕事

Insights and Essays on the Music Performance Library
edited by Russ Girsberger & Laurie Lake

伊藤 陽子

ライブラリアンという言葉は、ふつう、図書館員とか司書を指すが、オーケストラなどの演奏団で働く、楽譜管理者の意味もある。日本では「オーケストラ・ライブラリアン」と呼ばれることが多い。英語では、パフォーマンズ・ライブラリアン、あるいはアンサンブル・ライブラリアンと総称される(註1)。北米では、1970年代頃から次第に職業として確立し、現在では、厳しいオーディションを経て採用される。指揮者との関係は密接で、その地位は演奏者と同等か、それ以上と言われる。

本書は、米国のオーケストラ、オペラハウス、バレエ団などさまざまな団体に活躍するベテランのライブラリアンたちが、自分たちの仕事について語った、おそらく初めての本である。

「わが祖国」崩壊の悪夢

オーケストラ・ライブラリアンのもっとも重要な仕事は、演奏会で使う楽譜を、用意することである。プログラムが決まると、ライブラリアンは指揮者と打ち合わせ(レンタルや自前作成も含め)パート譜を揃え、間違いチェックと修正、ボーイングや指揮者による指示の書き込み、リハーサル番号の

調整など、準備作業を行う。

楽譜にはふつう、複数のエディションが存在するので、通常は指揮者が使うスコアを確認して、対応するパート譜を用意する。スコアとパート譜のエディションが異なっても、リハーサル番号に至るまで、問題ない曲もたくさんある。しかし、時にはこんなこともある。

ダラス交響楽団のチーフ・ライブラリアン、カレン・シュナツケンベルグが経験したスメタナの連作交響詩「わが祖国」全曲演奏の場(註2)。この楽譜は、エディションごとの違いが大きい上、楽章によって、パート譜に読みにくい箇所がある。同一エディションのスコアとパート譜の間でも食い違いがある。その上、客演指揮者のスコアは、異なるエディションを組み合わせたものに、長年の経験に基づく変更を加えた「パッチワーク型」だ。さて、どうしたか。

彼女は、指揮者と打ち合わせを重ねる一方、全曲演奏の経験をもつライブラリアンたちに問い合わせ、エラーリストや、楽章の繋ぎなどの細かい情報を入手し、どの楽章にどのエディションを選べばもっとも問題が少なくて済むか調べた。予算も考え合わせ、最終的に、3つの楽章のパート譜はスプラフォンからレンタル、演

奏する機会が多い3つについては、購入した。入手後のパート譜のチェックや指揮者指示の書き込みも、チームで取組み、なんとか間に合わせた。初リハーサルまで何度か「わが祖国」崩壊の悪夢を見たそう。

バレエ・ライブラリアンは もっと大変

サンフランシスコ・バレエでライブラリー業務を統括するマシュー・ノーティンも、一番大変なのは楽譜の準備だと言う。

おなじみ、チャイコフスキー「白鳥の湖」でも、事情は変わらない。どのバレエ団の公演も、振付によつて、音楽は大胆にカットされ、順番が変わり、時に無関係な楽節が挿入される。振付家は楽譜準備のことなど、まったく頭にならない。リハーサル・ピアニストや指揮者から刻々情報を得て、変更すべてを書き込んだスコアを楽譜浄書家(コピーリスト)に、(十分余裕を持つて)送る、それでようやく、貼り込みや複雑怪奇な矢印のない譜めくりにも配慮したパート譜が準備できる。

初めての作品に取組む場合は、数週間、あるいは月単位かけて、音楽を振付家の考えに沿って編集していく。その際、別の作曲家

の音楽が挿入されることさえある。だから、出版社から届いたパート譜は、大きく変更されることになり、結局、頭から作り直すことも少なくない。

仲間どうしのネットワーク

この本の第1章では、バンド、オペラハウス、音楽祭、音楽出版社・レンタル部門、音楽大学・コンセルヴァトワール(註3)、合唱団、映画録音スタジオなどで働く10人のライブラリアンが登場して、仕事内容を語る。親団体によって、生じる問題やその解決策は異なるが、共通する課題ももちろん多い。そこで大きな力を発揮するのが、仲間どうしのネットワークである。インターネットとメールのおかげで、誰もが世界中の情報を探せる時代になったが、それよりずっと以前から、世界のオーケストラ・ライブラリアンたちは、楽譜のエラー情報を交換し、ボーイング譜を貸し借りするなど、互いに協力してきた。

MOLA 主要オーケストラ・ライブラリアン協会

Major Orchestra Librarians' Associationは、北米のオーケストラ・ライブラリアンが、1983年に結成した協会である。米国

フィラデルフィアで開かれた第1回会議の参加者はわずか25人だったが、今や、世界中270以上の演奏団体から450人以上のライブラリアンが参加する大きな組織に発展した(註4)。現在、MOLAは国際的非営利団体として、ライブラリアン相互のコミュニケーションを促進し、ライブラリアン育成とサービス向上に力を尽くし、出版界と協力して演奏楽譜の質の向上を図るなど、演奏芸術全体の発展を目指して活動している。

MOLAのホームページでは、ライブラリアンのキャリア情報はじめ、「オーケストラ楽譜作成のガイドライン」、「北米のレンタル楽譜 権利と責任」など、参考になる資料が多数公開されていて、誰でも読むことができる。

音楽の現場

実は、米国にも、オーケストラ・ライブラリアンの公式な資格はないし、養成する学科やコースも存在しない。本書の冒頭、10ページにわたって掲載される執筆者の経歴紹介を見るだけで、この仕事がどれほどの学識と経験を必要としているか、およその見当はつく。

本書の第3章では、ベテラン達が、自らの経験に基づいて、プロとしての基本姿勢、求められる資

質や能力について書いている。ライブラリアンになるための、オーディションや面接に関する情報も掲載されている。

続く第4章では、オーケストラ・ライブラリアンの実務が詳述される(註5)。「事前に計画をたてる」、「パート譜の探し方」、「エディションを選ぶ」、「校正の仕方」、さらには、「著作権」、「オペラなどの」グラランド・ライツ」、「演奏ライブラリーにおけるコピー機の違い」、「データベースの作り方」など、さまざまな項目を、その道のベテランが解説している。

第2章と第5章では、ライブラリアンの他に、音楽出版者、楽譜ディーラー、楽譜編集者、楽譜浄書家など、協力して働く人たちが、寄稿している。指揮者、作曲家、編集者からの短い寄稿もある。簡条書き、思い出話風、Q&A形式と、書き手によって文体はさまざまだが、具体的に、エピソードに富んだ話は、興味深い。

オーケストラ・ライブラリアンという、譜面台に楽譜を準備する人々が書いたこの本は、いくつもの「音楽の現場」を描き出す。音楽の世界で活躍を目指す音大生に、ひろくお勧め。

註と参考資料

- 註1 英語版 Wikipedia 「Ensemble Librarianship」 歴史、タイプごとの特徴から今後の課題まで、詳述されている。参考文献やサイトも充実している。
http://en.wikipedia.org/wiki/Ensemble_Librarianship
- 註2 「Mein Vaterland, Mein Gott」/Karin Schnackenberg Polyphonicハイトの記事
<http://www.polyphonic.org/2010/01/16/mein-vaterland-mein-gott/>
- 註3 国立音楽大学で言えば、4号館の図書館ではなく、新1号館音楽資料課「ライブラリー室」にあたる。
- 註4 MOLA Major Orchestra Librarians' Association 日本から5団体、7名が加盟している。
<http://mola-inc.org/>
- 註5 実務に関しては、本書の編者2人が執筆した「The Music Performance Library」という本を出版やれつせ (Meredith Music Publications 2011 請求記号: J122-342) エディンボロの探し方・選び方・購入とレンタルの目録、保存・補修・演奏会のための楽譜準備、ホーインク取入間違った訂正、パート譜の配布と回収などについて、図や業務用フォーマット付でより具体的に書かれている。第7章には、オーケストラ・ライブラリアンから学生、作曲家、学生指揮者に宛てた手紙の形で、楽譜の仕上げ方や指揮の指示の出し方など、具体的なアドバイスを収載。
- ☆ 日本オーケストラ連盟のホームページ
<http://www.orchestra.or.jp/>
- ☆ オーケストラ・ライブラリアンという仕事 密着取材! 東京「ライバーモニー」月刊バイパス 2009年4月、33号 p.28-31 請求記号: P841.28(8)
- ☆ 「ライブラリアンは指揮者のもう一人の片腕」広島交響楽団ライブラリアン北米留学記(月刊誌バイパス1997年5月1-8号掲載) <http://www.jpops.co.jp/kiijib/ippan-02.html>

